

英 語（リスニング）

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和5年度大学入学共通テストの「英語（リスニング）」の受験者は、本試験と追・再試験を合わせると464,931人で、受験者全体の約98.1%に当たる。このことは、本テストの実施そのものや、問題の質や難易度、使用される言語材料が、受験者のみならず、全国の高等学校関係者及び英語教育関係者等、多方面に与える影響が非常に大きいことを意味している。

追・再試験「英語（リスニング）」について検討・評価した項目は、報告書（本試験）14ページに記載の8つの観点についてである。また評価に当たり、以下の5つの資料を主に参考とした。

- (1) 高等学校学習指導要領解説（平成21年告示）外国語編・英語編
- (2) 令和5年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針
- (3) 「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「英語表現Ⅰ」の検定教科書
- (4) 令和4年度大学入試共通テスト問題評価・分析委員会報告書
- (5) 令和5年度大学入学共通テスト「英語（リスニング）」（本試験）

2 内 容・範 囲

本試験と同様に、「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「英語表現Ⅰ」で取り扱われる範囲からの出題であり、日常の問題から社会問題まで幅広い分野において、情報を整理したり、話者の意図を汲み取ったり、講義等の内容と図表を統合したりして解答する問題であった。

第1問A 話題は日常生活で想定されるもので、受験者が理解しやすい適切な内容。高校の授業で学習する範囲内の内容になっている。本試験同様、言語を理解するだけではなく、状況と含意を汲み取る力が試されており、文脈から判断する力を要する良問である。しかし、sweaterの発音とadmire, look nice on youの表現の難易度を考えた場合、問1と問2の順番は逆の方が良かったのではないかと。

第1問B イラストが理解を助ける役割を果たす問題。話されている場所や状況を判断する力が試されている。文章は短いですが、受験者は冒頭に聞こえた内容を記憶し考える必要がある。問7の道案内の設定は、知らない人に道を聞かなくても、ネットで調べて情報が得られる時代であるため、日常余り起こらない場面設定なのではないかと。

第2問 話題は生物、デザイン、キャンプ、観光と、身近で興味が持てるものになっており、良問。問8は、語句がやや難しいものでも、イラストが理解を助けており、Which stage has the man just learned about?というホテルの成長過程を問う良問。ただ、問11の問い自体は良問であったが、アイコンと図はやや分かりにくく、受験者は困惑したのではないかと。

第3問 夏休みの予定や週末の出来事の話、郵便局でのやり取り、映画を見に行く話、レストランの注文の場面、荷物を運ぶ手伝いの場面など、身近で親しみやすい内容を1回聞いて質問に答える問題。問17の大変な状況下にある人を助ける状況設定はとても良い。一方、問13のイギリスの通貨ポンドは余り受験者になじみがなかったのではないかと。また、郵送のエアメールも、今後時代に合わなくなるのではないかと。

第4問A 問18～21の大学の授業で配布された資料のグラフを見ながら、クラスメートの発表を聞いている状況設定は、受験者が今後の大学生活が想像できるため適切で良問。しかし、実際

- の授業において発表をする時の英語表現は、聞き手の理解に配慮してもっと分かりやすい言葉を使うよう指導していると考えられ、改善が求められる。また、問22～25のフィットネスクラブの料金プランを聞く設定は、受験者にとって余りなじみがないトピックだったのではないかと考えられる。
- 第4問B 国際会議の会場を決めるために4つの施設を比較するトピック。状況設定を理解して、条件に合うものを選ぶ内容で、必要ではない情報が混じる中、本当に必要な情報のみを探すことになることは、日常によくあることであり、良問である。
- 第5問 本試験のトピックよりなじみがなく理解しにくかったかもしれないが、テクノロジーを使ってバーチャル（デジタル）美術館を楽しむことができるようになった今の時代に合う良いトピックだった。
- 問6問A 二人の人物が今度行く旅行のことを話している。スマートフォンがあるのに、カメラを持参したいと言うManaに荷物が重くなるのに必要か、と疑問を呈するRaymondのやり取りは、異なる意見を交換するありそうな設定で良問である。
- 第6問B 四人の学生が卒業研究を単独で行うか、グループで行うかを話し合っている。それぞれの卒業研究での目的の違いと、単独とグループ研究それぞれの利点を話し合う点が興味深いところである。受験者にとって身近で理解がしやすい話題で良問だと言える。

3 分量・程度

出題の形式は昨年と大きな変更はなく、設問数も大問が6問、設問37問で同じであった。読み上げ回数も変更はなく、第1問～第2問が2回、第3問～第6問が1回であった。アメリカ英語、イギリス英語、そして英語を母国語としない話者の英語など多様な英語が使用されていたが、全体的に音声は聞き取りやすかった。以下、準備時間をP、音声流れる時間をL、解答時間（2回読みの場合、1回目後と2回目後の合計）をAで示す。

- 第1問A（各英文4語～14語・2回読み、L：約8秒×2・A：約10秒）1～2文の短い英文を聞き、概要を正しく把握して最も適切な選択肢（文）を選ぶ問題。全体的には易しい問題であった。（難易度 ☆）
- 第1問B（各英文8語～10語・2回読み、L：約5～8秒×2・A：約10秒）1～2文の短い英文を聞き、その英文が表している選択肢（イラスト）を選ぶ問題。4種類のイラストの差はおおむね分かりやすかったが、問6についてはanotherの表す内容の聞き取りでの理解はやや難しかった。（難易度 ☆）
- 第2問（各対話文26語～30語・各設問6語～8語・2回読み、L：約20秒×2・A：約10秒）全体としては標準的な問題であるが、問9のdefinitelyの語彙レベル、問11のイラストが判断しにくい可能性が考えられたこと等の理由から、難易度が高い問題もあった。（難易度 ☆）
- 第3問（各対話文約50語・1回読み、L：約20秒・A：約9秒）難易度は標準である。（難易度 ☆☆）
- 第4問A（問18～21＝約80語・1回読み、L：約50秒・A：約15秒 / 問22～25＝約80語・1回読み、L：約45秒・A：約30秒）問18～21における大学の講義という設定は、受験者にとって身近であったと思われるが、問22～25でのフィットネスクラブという設定は状況を把握しづらい受験者が多くいたと考えられる。（難易度 ☆～☆☆）
- 第4問B（英文4名の各話者＝約45語前後・1回読み、P：約15秒・L：約90秒・A：約15秒）解答時間が短いため、聞きながら整理し、発言の内容について必要な情報と必要でない情報を区別しながら聞き取る必要があり、難易度は高めである。（難易度 ☆☆）
- 第5問（英文講義＝約270語 / プレゼンテーション＝約50語・1回読み、P：約55秒・L：合計

約150秒・A：合計約70秒）。難易度はやや高めである。（難易度 ☆☆～☆☆☆）

第6問A（対話文全体＝約160語・1回読み，P：約15秒・L：約65秒・A：約20秒）問35は，発話者二人に共通する意見を選択する必要がある，問34に比べると若干難易度が上がったが，全体を通して聞き取りやすい英文であった。（難易度 ☆☆）

第6問B（英文全体＝約220語・1回読み，P：約17秒・L：約100秒・A：約35秒）四人の発話は聞きやすく，容易に識別ができた。問37については，正解のグラフ中にリスニング英文には取り扱われていない指標があるため若干難易度に影響したようであり，難易度はやや高めである。（難易度 ☆☆）

4 表現・形式

第1問A 短いモノログに合う英文を選ぶ問題。問1はadmiresが分からなかった受験者がいたかもしれないので，正解率を他の3問並みにするとすれば，likes等と言い換えることも可能である。

第1問B 短いモノログに合うイラストを選ぶ問題。問5はunderをonと聞き違えた受験者がいたと思われるが，問題はない。問7は英語が得意でない受験者の中には，left / rightは聞き取れたものの，「道の」ではなく，「地図上の」で判断した者がいたと思われる。そこを意図して作成されたとすれば，ねらいは良かったと思われる。

第2問 短い二人の対話とそれに関する問いを聞いて適切なイラストを選ぶ問題。問9ではDefinitelyをExactlyに，addをputに置き換えるなど，受験者になじみのある単語を使うと正答しやすくなるだろう。また，don't have enough timeをno timeとすれば，より分かりやすくなっただろう。問11は観光地を巡る順序を問う形式だった。湖を船で巡るという場面設定は受験者にとって分かりにくい。その上，イラストの中の湖を認識するのが難しいので，陸上での地図にするなどの改善を求める。

第3問 短い二人の対話を聞き，問いの答として適切なものを選ぶ形式。簡単な状況説明と，英文の問いが書かれている。問12は対話の中に色々な情報が入っているので，難易度が高かった。Why don't you～?やflexibilityの意味がリスニングで瞬時に理解できるかがポイントである。問13は場面設定に難があるのではないか。問14は，映画を見に行く約束という場面設定が自然で，聞きやすい問題であった。これを1番目の問題にしても良かったのではないか。問15はniecesとnephewsが受験者にとって余りなじみのない単語であったため，状況把握が難しく，解答が分かれたのではないか。問17は②のwithをcarryingにすれば正答しやすくなったかもしれない。第3問は全体的に，対話の最後まで気を抜かず聞いて，内容を把握する力が問われる問題であった。

第4問A 問18～21は発表を聞き，グラフが表しているものを答える問題。the leastなど，聞き取りでは難しい語も含まれていた。選択肢の順番と説明の順番を同じにしても良いのではないか。

第4問B 四人の話聞き，条件を満たしている人物を答える問題。同じ事を違う表現で表したり，最後までしっかり聞かないと解答できなかつたりなど，工夫がなされていて良問である。

第5問 大学の講義を聞き，ワークシートをまとめる問題。ワークシートが講義の内容に沿っているので，比較的解答しやすい問題である。問27はphysical spacesと選択肢のphysical locationsが一致しなかったのではないか。問32は講義の終盤のsustainableが耳に残ってしまい，④の誤答を選んでしまった受験者がいたと考えられる。問33は4つの選択肢の英文が長いため，読み取る時間が足らず，解答が分かれたのではないか。この選択肢をもう少し短い英文にして，こども聞き取りにして解答番号だけを答える問題にしてはどうだろうか。

第6問A 二人の対話を聞いて、発言の内容や意図についての問いの答えを選ぶ問題。問35は問いのbothを見落とししたか、Manaの台詞のbutに着目するあまり、その前のI do, too.を逃してしまった可能性がある。

第6問B 四人の発話を聞いて、問いに当てはまる人数を答える問題。問36の聞き取りは比較的易しかったようである。問37は事前にこの設問とグラフをしっかりと読んでいるかがポイントである。多様なグラフを用いているところは良いが、例えば、②のグラフはヒントとなるCommunicationを一番上にもってくるなど、もっと見やすい工夫があっても良いのではないか。

5 ま と め (総括的な評価)

流れてきた音声を文字通りに聞き取るだけでなく、実生活に基づいた場面設定に応じての含意を汲み取り理解する力が求められ、思考力・判断力・表現力等を要する内容である。高校の授業でも、英語を実際のコミュニケーションで使う場面や状況を想定し、生徒自らがそれを体験するような統合した言語活動を行う授業設計と指導の在り方を追求していく必要がある。

(1) 本試験との比較

共通テストにおいては、難易度や出題量、出題形式の相違が本試験と追・再試験との間で最小限であることが望ましい。平均点を見ても、また、問題を総合的に見ても、この点においては、本試験と追・再試験のいずれの受験者においても有利・不利な状況が生じるような大きな相違点はなく、バランスの取れた問題だった。

(2) 形式等の特徴

実施時間は30分、1問あたりの配点は1～4点の幅があり、読む回数は2回読み（第1問と第2問）と1回読み（第3問～第6問）に分け、満点は100点であった。昨年度、一昨年度に引き続き、本テストでは「リーディング」と「リスニング」がともに100点満点で構成されていたことから、より英語4技能のバランスを意識したものであったと評価する。また、設問や場面設定の指示が日本語で記載されている点は、測る力を「聞く力」に絞るための措置として有効であると考えられる。読む回数については、試験前半における2回読みについては、ウォーミングアップの意味もあり、また大多数の受験者が正解できる問題の必要性も考えると、適切な配慮とも捉えることができる。一方、第1問Aより第1問Bの方が受験者も取り組みやすいことから考えると、AとBを入れ替えて実施することを検討しても良いのではないか。また、第5問での講義の内容を聞き取りワークシートや図表をあわせて答える問題について、今年度の問題では、昨年度までの「講義の続き」ではなく、グループの発表を聞く形に変更されたが、中途半端な印象も受けた。また、問題文は変更されておらず、実際には「講義の続き」ではないが、「続きを聞き」のままである。「次に学生の発表を聞き」とすべきではないか。

(3) 学習指導要領との整合性

学習指導要領に、外国語科の目標として掲げられている「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」問題として、適切であると考えられる。本テストでは、モノログ、二人の対話、講義、四人の討論といった様々な場面や状況が設定されている。またイギリス英語や英語を母語としない話者の音声も使われ、多様な話者による現代の標準的な英語が使用されている。学習指導要領に明記されているように、様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態への配慮がなされていると評価できる。また、正答率等の結果を見ても、英語の多様性が正答率に影響してはいないと考えられるので、アメリカ英語以外の英語の比率を増やしても良いのではないかと考える。

(4) 高等学校の授業改善への影響

本テストでは、与えられた状況やコミュニケーションの場面における発話から情報を整理し、内容全体から話者の意図等を把握する、思考力・判断力・表現力等を問う出題が多く見られた。

授業では、様々なタイプの英語を聞いたり読んだりする活動はもとより、聞いたり読んだりした内容について、自分の言葉で言い換えて話したり書いたりするような活動を十分に行うことにより、話される内容を一度で正確に聞き取る力の伸長が図られる。特に、本テストにおいての第5問、第6問については、「聞く力」だけでなく、素早く「読む力」も要求されており、4技能を統合した言語活動を十分行う必要があるというメッセージが伝わる問題である。授業でも、他者の発表を聞いてまとめたり、個人またはグループで発表したりする過程でのアウトライン作成等、様々な活動の成果が試される問題になっていると考える。

(5) 要望・提案

今後も、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）のA1からB1レベルに相当する幅広い題材を参考に、各レベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことで、適切な問題の作成を希望する。

内容については、受験者の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる題材で、日常生活で用いられる自然な表現を採用し、また高校や大学生活等におけるコミュニケーションの場面や話者の多様性を想定する中で、場面設定や状況を把握しやすいテキストを希望する。あわせて、社会の変化を考慮したトピックや、受験者の興味や思考が深まることにつながるトピックの選定であるとなお喜ばしい。第6問の間36にある条件を満たす者の人数を問う設問は、本試験の問題のように該当者の組合せを選ぶ問題の方が望ましいのではないか。その場合、四者択一ではなく、選択肢の数を6程度に増やす方が良いのではないかと考える。そのためにも、四人の登場人物の英語に多様性を持たせるなど、明確に区別できるような問題作成を希望する。